

公益社団法人上伊那教育会 主催
文学講演会 開催

期日：令和5年10月17日 会場：上伊那教育会館講堂

『一茶の俳句の魅力 ～ 南の井月 北の一茶 ～』
堀井 正子 先生（近代文学研究家）

上伊那教育会では、教師としての専門性を磨くとともに人間性の向上を図るため、また、地域の皆様も含めた生涯学習の機会とするため、職能研修事業として講習講演会を実施しています。

文学研修は、哲学研修や授業研修とともに教育会の三大研修として位置づいています。今回の堀井先生の講演会は、4年ぶりに一般の方にも参加していただく中で実施することができました。講演の様子は会員専用ページで公開中です。

『堀井正子 先生 プロフィール』

東京・横浜で育つ。東京教育大学文学部卒業
高校教員。短大、長野高専、信州大学、中国の武漢
大学等で講師を務める。

現在、県カルチャーセンター、八十二文化財団教養
講座の講師、信越放送ラジオ「武田徹のつれづれ散
歩道」にレギュラー出演中。信濃毎日新聞「クレン
ソンの「ことばのしおり」の執筆等を担当。

<主な著書>

「ふるさとはありがたきかな
－女優松井須磨子－」

「戸隠の絵本」

「源氏物語 おんなたちの世界」

「ことばのしおり」「ことばのしおり 其の弐」

「日々ことばのしおり」「出会いの寺 善光寺」

「一茶さんの子守歌」など

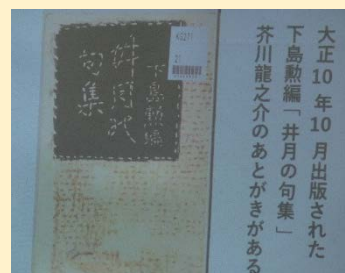


堀井正子先生 講演から

この教育会でここ2年間、井月の話をさせていただいてきました。よく言われるのは「南の井月 北の一茶」、長野県を南北に分けたときに伊那谷を中心に親しまれてきたのが井月、それに比べて北信地域で親しまれてきたのが一茶だったように思います。井月の姿を描いた絵は、出身地の長岡には幕末の激戦のおかげでほとんど残っていません。今残っている絵を見ると、井月ってこんな人というイメージを持つことができます。あとはたくさんの俳句なんですけれども、下島勲さん、この人の父親が俳句が好きで、ここへ井月がやってきて好きなお酒を飲みながら俳句の

師匠をしていて、家はといえば「ここがあなたの家ですよ、ここに養子という形で住んでいいんですよ」と言ってくれる人もいたのですが、一か所に住むことなく転々と俳句の好きなおうちを訪ねては一緒に楽しく酒を飲み、俳句を詠むというような生活をしていたので、あまり自分の手元に自分の俳句を残していません。一茶と比べるとすごく違って、一茶は自分の詠んだ句を自分でちゃんと残していました。それ以外に、エッセイ・日記なども自分の力であるいはお弟子さんなどに頼んでちゃんと残してきていました。一方、井月は転々と訪問した家で残しておいてくれた句がやっとなに残っている、そんな感じです。一茶と井月はずいぶん違うんですね。生き方というか性格というか。

この井月の句を集めて句集を作りたいという思いから、伊那谷を歩いて回って掘り起こす形で出されたのがこの句集です。(右図参照) 大正10年のことです。この句集がきちっと残らなければ、井月の句は残らなかったかもしれません。この句集を出すのに応援してくれたのが、実は芥川龍之介なんです。簡単ではないこの句集を作ろうと伊那



谷を歩き回って集めてくれた下島勲さんのバックアップについてくれたのが芥川龍之介でした。この句集を作るにあたってのやり取りが手紙にも出ています。井月の句集を刊行するにあたって世間にインパクトのある形で出したいわけです。下島勲が本名、空谷(くうこく)が「号」に当たるのですが、下島勲の名前で出して全世界にインパクトが与えられるかということ、なかなか難しいところがある。手に取って、できれば買ってもらって読んでくれれば井月の句の良さが伝えられる。そこで、その当時一番大物であった高浜虚子に井月をたたえる句を書いてもらって冒頭に載せたのです。「虚子が推してくれている井月」という形にできていて、ずっと井月の句があって最後に芥川の、今でいうとあとがきが載せられている。芥川もこの本を出すうえで大きなインパクトになってくれている。資料 p1 (下記記載資料) に載せたのはその発刊に際して芥川が下島にあてて書いた手紙です。内容は、句集の最初に載せる文面、それを題句というのですが、それを高浜虚子にお願いに行ってきたという手紙です。こういう手紙に芥川がすごく気楽に句を付けているということが面白いと思っています。決して推敲して作って付けているのではなくて、さらっと手紙の横にこういう句を付ける。俳句が特別なものではなくて、日常の中の一コマのように句を楽しんでいる芥川があって下島空谷がいる。こんな風に伊那谷の人たちも井月が来る、じゃあ飲もうよ、じゃあ句を詠もうよという雰囲気、芥川と下島勲の間でも同じ空気が漂っていたなというのを感じます。もう一つは句集が刷り上がった時に送られた手紙です。ここでも句がさりげなくそっと添えられています。「下島さん、落栗のように散らばっていた井月の句をよく集めましたね。」というお祝いの句です。お互いに手紙にそっと句を付け合う。そんな日常の中で何とか父の大好きだった井月の句集を出したいという思いに芥川が応えていく。そういう人間関係というのがなんかいいなあとは私は思っています。

この後、堀井先生の優しい口調で小林一茶の句について語られていきました。

小林一茶が残した句の優しさに触れさせていただけた、とても素敵な研修となりました。

ぜひ上伊那教育会「ケルン」に載せられている講演会映像をご覧ください。

<資料 下島勲と芥川龍之介の手紙のやり取りから（当日配布資料より抜粋）>

芥川の手紙と句

一、「井川の句集」を刊行するにあたって、芥川龍之介は、題句を高浜虚子にもらいに、鎌倉までお願いに出かけた。

大正十・九・二 下島勲あて

昨日鎌倉に参り虚子に会い題句をたのみ候ところ快諾いたしくれ候、両三日中に題句送るべき旨申し候間ご休神下され度候、なお句集の仮名少々直し候上、虚子の題句と得次第早速印刷にとりかかるべく、右もよろしくご承知下され度候

夕立や鮎の鮎皆生きつべう

井月ぢや酒もて参れ鮎の鮎

二、「井月の句集」が刷り上がり、下島の所に届けられた。それを芥川の家へ届けてきた、芥川は、その本をしかるべき人々に届けた様子が伺われる。

大正十・十一・四 下島勲あて

拝啓お使いありがたく存候ご本確かに落手それれへわけつかわすべく候

井月の句集成る

月の夜の落栗拾い尽くしけり

芥川の句「月の夜の落栗拾い尽くしけり」は、井月が塩原梅関方へ入籍した時の句「落栗の座を定めるや窪溜り」を踏まえてのものと思われる。

参加者の感想

○今回堀井先生の一茶の俳句のお話を聞いて、一茶の句が覚えやすく、庶民的で、土臭く、田舎くさく、素敵な句であることがわかりました。また、一茶がどんな光景を見て、何を考え、幾多の人間味あふれる俳句を詠んだのかもわかりました。俳句の奥深さを感じました。

○句を読みながら感情を込めて語られる堀井先生の姿が印象的でした。生徒たちに作品の魅力を伝える難しさを日々感じておりますが、授業者の熱意を、感動を、情熱を、繰り返し訴えかけることの大切さを学びました。

○「句の鑑賞は人によって様々、お互いに感じ方を出し合って心を鼓舞し合うもの」とおっしゃっていたことが心に残りました。句に対する思いや解釈、エピソードなどをとても楽しそうに語ってくださる堀井先生の姿が印象的でした。堀井先生の柔らかな語りで文学の楽しさに浸るひとときをいただきました。

○「一茶さんの子守歌」の抜き出しを読ませていただくだけで、堀井先生の優しさが心にしみました。手に入れてゆっくり読みたいと思いました。一般の方がたくさんお見えになってとてもよかったです。ぜひ来年度も来ていただきたいです。

○今回初めて文学講演会に参加させていただきました。教科書に載っている一茶の句に関しては知っていましたが、今回初めて知る句がたくさんあり勉強になりました。一茶の句から一茶が見たもの、感じたことが伝わるような気がしました。ただ句を読むだけでなく、作者の考えや人生を考えながら俳句を楽しめると感じました。俳句を親しむ授業があるので、俳句の面白さ、魅力を子供たちに伝えていきたいです。

